

# 結城寒川誌

## 【1】 古代

### (1) 下総国千葉郡

私たちのまちは、古代、下総国千葉郡に属していました。

この地方の有力者は千葉国造とよばれ、大私部直善人（おおきさきべのあたひよしひと）という人の名が記録されています。709年に僧行基が創建し聖武天皇より寺号を賜ったと伝わる市内最古の寺院・千葉寺はこの一族の氏寺であったといわれており、青葉の森公園内の荒久古墳はその墓と推定されています。また、千葉郡の中心である千葉郡衙（郡役所）もこの付近にあったのではないかと考えられています。

なお、周辺の古墳としては、新千葉三丁目の旧農業会館敷地にはかつて鷲宮塚古墳が存在したほか、新宿一丁目の白幡神社も砂丘に築かれた古墳上に祀られていることが知られています。昭和31年2月、白幡境内から古墳時代の金銅製直刀が二振出土しています。

千葉郡は千葉郷、池田郷など7つの郷に分かれていましたが、それぞれがどの地域に該当するかについては古くから議論があります。

#### 千葉郷と池田郷の位置についての謎

古くから千葉郡の中心であったと考えられる千葉寺の近隣から出土した釣燈籠（重要文化財・東京国立博物館所蔵）に“池田郷千葉寺”との銘文があるので、千葉寺周辺は千葉郷ではなく池田郷であった可能性があります。中世以降の千葉町の中心部にも“池田の池”（本町公園付近）や“池田坂”（市場町から猪鼻山に登る階段）など池田郷にまつわる名称が伝わっていることから、千葉寺の台地から千葉の中心部の低地にかけては“池田郷”だった可能性があります。すると、千葉郷とはいったいどの辺りだったのか。一説には、作草部、黒砂、稲毛など、千葉の中心から北西部に広がる台地上ではないかとも言われています。後述する千葉常胤は「千葉山に葬られた」といわれていますが、稲毛区園生町の国道16号を挟んだ向かい側に「千葉山」とよばれる一角があり、墳墓群が存在していました。千葉郡がその辺りだとすると、なぜ千葉郷の中心部が千葉郷ではなく池田郷なのか、なぜ池田に拠点をおいた豪族が千葉氏を名乗ったのかなど、大きな謎となっています。

## (2) 古代東海道河曲駅

古代、都から地方へ“駅路”という広い直線道路が整備されていたことが近年わかってきました。都から伸びてきた古代の東海道は当初、現在の東京付近が低湿地で通れなかったため神奈川県横須賀市付近から東京湾の入口を舟で房総半島に渡り、上総国（木更津市や市原市など）から下総国へと入っていました（都に近い“上”の“総の国”が“上つ総の国（かみつふさのくに）”で“上総（かづさ）”。“下”の“総の国”が“下つ総の国（しもつふさのくに）”で“下総”（しもふさ・しもうさ））。その駅路の跡は末広と千葉寺町の町丁境の直線に重なるとする説が有力です。

駅路には一定距離毎に馬を乗り継ぐための駅（うまや）がおかれていましたが、千葉には“河曲駅（かわわのうまや）”がおかれていたといわれています。河曲という名は都川が大きく屈曲していたことに因むとされています。千葉家が館を構える以前、都川は都町から祐光町方面へと流れ、現在の葭川の流路を通って海に至っていたと考えられていて、川は本町の微高地を半島状に取り囲むようにして大きく屈曲していました。これに関連して、地元には「猪鼻山の麓の都川は千葉家が堀として掘ったものだ」との伝承も残っています。河曲駅は、川に囲まれた半島状の本町の微高地のどこか、またはその南にあったのではないかと考えられており、場所は千葉神社付近、県立中央図書館付近、長洲周辺などの説があります。

### 千葉郷と池田郷の位置についての謎

駅路には水捌けのために側溝が設けられることが多かったといいますが、その側溝を後に農業用水に転用した例が群馬県などで発見されています。古代東海道の位置と推測されている千葉寺町と末広の町丁界には近世の丹後堰用水路が併行しており、興味深い点です。

## (3) 更級日記

更級日記では作者が1020年に父親に伴って上総国府（市原市）から都に上る様子が記されています。その中に“いかた”という所に泊まり、翌朝、深い川を舟で渡ったとの記述があります。その“いかた”は池田のことで、川は古い都川のことだという説が有力です。川を渡った地点は椿森陸橋付近と考えられます。

## (4) 結城野

その頃、港町や神明町を中心とする海沿いの一帯は結城野とよばれていました。結城の語源は布の原材料となる“ゆう”の木の生える所といわれています。更科日記には“深い川”を渡ったときに、布を織って財を成した長者の屋敷の跡として残る門の柱を見たとの記述があり、その近傍の千葉神社の前身となる寺は機織りの神が祀られていたとの記録（1680年、栗飯原右京銘「千葉妙見社元由」）があることから、この結城野は布の原材料の産地として名付けられた地名かもしれません。

### 古代東海道と寒川旧道についての謎

縄文時代、海は今よりも内陸に入りこんでいて（縄文海進）、時代が下るにつれ、次第に沖へと引いていきましたが、長らく海の底だった場所は陸地になってもしばらくは湿地のようにぬかるんでいたと考えられます。また、古代の駅路は、都からの使者を一刻も早く各地の国府に向かわせるため、国府と国府の間を直線的に最短距離で結んでいました。このような背景から古代東海道は今の海岸線よりも内陸の千葉寺町と末広と町丁界あたりにあったと推測されています。しかし、平安時代の中頃になって中央集権体制が弱体化すると都からの使者のために直線的につくられた駅路は次第に使われなくなりました。また、この辺りの海岸線近くの土地が乾いて人々が住み始め、海岸線沿いにできた集落を縫うように道が形作られてきたと考えられています。現在の寒川旧道がそれにあたります。古くは「房総往還」と呼ばれていました。昭和戦後に末広新道（現在の道路愛称は末広街道）が開通するまで、蘇我方面から千葉までの間は、寒川旧道と根道（ねみち）しかありませんでした。根道の「根」は「台地の中腹」の意味で、今も中村古峽記念病院下の崖の中腹を縫うような細い道が残っています。この道が、古代東海道が廃された後に、それを引き継いだ生活道路であったのではないかと思われまます。

大きな謎として残るのは、房総往還（現寒川旧道）はいつ頃、形作られて、古代東海道から人の流れが房総往還に移ったのはいつ頃からか、という点です。一般的に、駅路が使われなくなったのは西暦1000年前後の数十年あたりだといわれています。この近辺の出来事を挙げてみると、

- ・927年 延喜式神名帳に「蘇賀比咩神社」と記載されている神社は現在の蘇我町の蘇我比咩神社だとされているが、場所は房総往還沿いにある。すでに房総往還はこの頃に形作られていたのか？

- ・995年 藤原実方が陸奥守に任じられて下向の途中に上総に立ち寄るため君待橋を通ったときに句を詠んだという伝承がある。すでに駅路は廃絶していて、都から来た貴族でさえも房総往還を通ったのか？
- ・1020年 更級日記の作者が千葉を通過。通ったのは駅路だと考えられているようだが、もしかしたら房総往還を通ったのか？

## (5) 羽衣の松

現在、千葉県庁議会棟前に“羽衣の松”がありますが、これにはいくつかの伝説が伝わっています。

### (ア) 千葉の蓮と行基

今から千年以上も昔、このあたりは“池田の里”と呼ばれ、水辺にたくさんの蓮の花が咲いていました。行基という偉いお坊さんがそこを通りかかると、千枚も（たくさん）重なって茂る葉の中に1つの茎に2つの花を咲かせている青い蓮の花が光り輝いているを見つけました。そく見ると、その中には小さな観音様の像がありました。都に戻った行基が聖武天皇にこの話をすると、天皇はとても感激して、そこに寺を建てるように命じ、その寺の名を「青蓮千葉寺」と名付けたそうです。今の千葉寺です。

千葉というのは「たくさんの葉が茂るところ」という意味だともいわれていますが、最近の研究で、実際にその頃の千葉の町が周囲をぐるりと水辺に取り囲まれた町だったことが判ってきました。

### (イ) 天女と千葉常将

少し時代が下ると、この池は“池田の池”と呼ばれる名所となり、蓮の花が咲く時期には多くの見物客がつめかけるようになりました。そして、夜になって人がいなくなると天から天女たちが降りて来て、ひと時を楽しむようになり、人々はその美しさを噂し合いました。この地のお殿様だった千葉常将という武将がその話を聞き、どうしてもその美しい天女と結婚したいと思いました。常将は天女が近くの松の枝にかけていた羽衣をこっそり隠してしまったので、飛べなくなった天女は常将与結婚することになり、生まれた子供が代々千葉を治めたといわれます。

## (ウ) 甘酒売りのお婆さん(妙見様の乳母)

別の伝説では、天女の羽衣を隠したのはお殿様ではなく、近くに住む甘酒の売りのお婆さんだったそうです。実はそのお婆さん、人間の姿をしていますが、実は星の神様の乳母（母親の代わりにお乳を飲ませて子供を育てる人）で、常将に天女を引き合わせるために隠したとも伝わっています。以前には、その乳母を祀る社が市場町の御飯屋の前にあったそうです。千葉に遷される以前に最初に妙見尊が祀られていた群馬県高崎市の息災寺にも甘酒を作る妙見尊の乳母の伝承が伝わっています。

## (エ) 成胤と女官

さらに別の伝説もあります。常将から6代後の成胤というお殿様が仕事で京都に行ったとき、天皇に仕える女性から告白されました。当時、都の人からみると侍は身分が低く、特に関東の侍は東夷と呼ばれて蔑まれていましたので、とても結婚はできません。二人は手に手を取り合い、逃げるのように連れ立って千葉にやってきました。その女性は都で着ていた美しい衣をまもっていましたが、池田の池のそばまでくると、それを脱いで松に枝に掛け、身一つで成胤の館にはいってきました。翌朝、松に掛けられた見慣れない美しい衣を見た人々は、天女が降りたのではないかと噂し合ったそうです。

## (オ) 羽衣とオーロラ

片田舎の侍であった千葉一族が自分の家系を高貴に見せるため、京の姫をお嫁にしたり、高貴な血筋だという物語をいろいろと創り出して伝えてきたものと思われる。以前の羽衣の松は、千葉県庁新館付近の「千葉公園」という公園内にありました。

実は、最近の研究では、その頃、千葉でオーロラが観測されたかもしれないことが分かってきました。当時の人は、天に現れたオーロラから天女の羽衣を連想したのかもしれませんが。この伝説から私たちは、千葉の町が、水辺に囲まれて蓮の花が咲き誇り、天女が降りてもおかしくないほどの美しい町だったことを知ることができます。





## 【2】 中世

### (1) 千葉開府

1126年、土気の大椎から移った千葉常重が館を構え、千葉の町が開かれました。

### (2) 千葉の町

当時の千葉の町は、寒川旧道から大和橋を渡って千葉神社に至る道をメインストリートとして発展しました。大和橋から本町側は武士町で“堀内”と、大和橋から寒川側は町人町で“結城”と、それぞれよばれていました。堀内には千葉宗家の館と一族の守護神である妙見宮をはじめとする宗教施設、さらには下総一円に所領をもつ千葉一族の宿所や出先機関が、一方、結城には市場と港がおかれ、下総国の首府として内実を備えていたと考えられています。

なお、最新の説では、千葉宗家の館は猪鼻山ではなく、千葉地方裁判所の敷地が有力な候補地であるといわれています。「御殿跡」という小字名で、明治まで土塁で囲まれていたことが古地図から見てとれることによるものです。

結城の名残としては、港町に1440年創建と伝わる結城山満蔵寺がありました（結城幼稚園の跡地・現在は星久喜に移転）。ちなみに、満蔵寺と関係が深く1442年創建と伝わる明光山海蔵寺が寒川一丁目に存在し、寒川小学校が現在地に建設されるのと入れ替わるように新宿に移転しました（戦後、桜木町に移転）。

### (3) 千葉の守護神

千葉の町の範囲は現在の稲荷町から貝塚町までの間だったとされます。守護神である妙見宮の他に、町を守るための5つの社が崇敬されていました。

#### ①. 妙見宮

##### (ア) 由来

今から1000年以上前、千葉家の祖先である平良文と平将門の連合軍が群馬県高崎市郊外の染谷川での合戦中に敵に追いつめられたとき、空から現れた童子の加勢

によって難を逃れました。近くの息災寺に妙見尊が祀られていたので、この妙見尊が童子の姿になって加勢したのではと考えた良文は家来の粟飯原文次郎に、この妙見尊を一族の守護神としてお迎えするように命じました。文次郎は二人の娘とともに妙見尊にお出ましいただき、良文の館にお招きしたと伝わっています。文次郎と二人の娘は惣代七社明神として以前は千葉妙見宮に神として祀られていました。寒川神社宮司粟飯原家の祖先にあたります。

これ以降、千葉家は一族をあげて妙見を守護神として崇敬しました。一族が新たな領地に移住するときなどは、必ずといっていいほど、その土地に分祀を祀りました。福島県相馬、佐賀県小城、岐阜県郡上などが知られています。

妙見はもともと仏教世界の神で、北極星や北斗七星を神格化したものといわれています。そのため、千葉家は、星をデザインした家紋を用いたり（月星紋、九曜紋など）、町の北の突き当たりに妙見宮を置き、近くに日処山と月処山という一対の寺を配置したりと、星への祈りを意識した町づくりを行った一族でした。

## (イ) 創建

現千葉神社の地には、妙見尊が祀られる以前より、香取神社と、その別当寺である伽藍山歓喜院という寺が既に創建されていました。千葉開府に伴って、その敷地に妙見堂を建立し、それまで千葉家の館があった土気の大椎から妙見尊を遷して、その妙見堂にお祀りしました。

そして歓喜院を北斗山金剛授寺尊光院と改称し、妙見堂の別当寺としました。別当寺とは、神仏混交の時代に、神社の経営を管理する寺院のことです。現在でも、千葉神社の神輿は、先に祀られていた地主神である香取神社に経緯を表し、千葉神社から香取神社までの間は屋根に孔雀を付けずに渡御しています。

なお、土気の大椎から遷した妙見尊は一時、千葉寺の瀧蔵権現に祀られていました。それが盗み出されて現県立中央図書館前の田んぼに埋められて隠されていたところを掘り出されて、千葉氏の館に遷された後、妙見堂に安置されました。

## (ウ) 祭礼

千葉開府の翌年（1127年）より、祭礼が開始されました。日程は旧暦7月16日から22日までです。16日に妙見宮を出た神輿は大和橋を渡った先の御仮屋に滞在し、22日に妙見宮に戻りました。

神輿が御仮屋に滞在している20日に、“御浜下り”が行われました。結城の町人が御仮屋に出向いて神輿を引き受け、担いで海へと向かい、現在の出洲港にあった妙見洲と呼ばれる砂州から神輿を海に担ぎ入れました。この御浜下りがいつから行われていたのかについては、明からになっていません。古記録には「1233年に結城舟が始まった。それは御浜下りの送り舟だ」と、結城舟の開始年が書かれているだけで、御浜下りの開始について直接の記載が無いからです。ただ、地元には「田んぼに埋められていた妙見様を海で洗ったのが御浜下りの始まり」という伝承が残っています。田に埋められていた妙見尊が掘り出されたのは千葉開府の年の出来事だと伝わっていますので、その翌年の祭礼開始当初から御浜下りも行われていた可能性も考えられるのではないかと思います。

この祭では神輿の他に、舟形の山車を曳き、船上では舞を奉納しました。この舟形の山車についても、「1233年に結城舟が始まった。それは御浜下りの送り舟だ」という記録をもとに1233年から始まったと解釈されていますが、祭礼開始当初から同じような舟形の山車を曳いたことが岐阜県郡上郡栗栖郷の妙見縁起で確認されています。古記録に記載されている1223年というのは、その舟形の山車が「結城舟」という名称になり、その役目を結城の人々が担うようになった年ではないかとも考えられるように思われます。

開始当時の祭礼の様子については以上のような断片的な情報のみで、詳細を伺い知ることができません。同時代の連歌師の日記に「妙見の祭礼に三百匹の早馬を見た」との記述があります。現在、千葉常胤の次男を祖とする相馬氏が幕末まで領有していた福島県相馬市では「相馬野馬追」という祭礼が行われていますが、その原型となるような行事も行われていたのかもしれない。

## (工) 千学集

千葉家と妙見の古い伝承についての数少ない史料の中で、最も基本的な文献となるのが「千学集」です。千葉家と妙見信仰を伝えるために中世に編纂されたもので、千葉妙見宮に保管されていましたが、度重なる火災などで多くの部分が散失し、現在は一部の写本のみが伝わっており、「千学集抄」「千学集抜粋」などよばれています。

## (オ) 神仏分離とその後

妙見宮は、代々、粟飯原家が神職として祭祀を行い、別当寺である尊光院から名を変えた妙見寺の住職がその管理をして、幕末まで続けました。

戦国時代、千葉家は佐倉に拠点を移し、その後の豊臣秀吉による北条征伐によって滅亡しますが、妙見尊は幕末まで千葉に祀られていました。

明治の神仏分離により、妙見寺は千葉神社と改称しましたが、妙見は仏教世界の神なので神社の祭神として祀ることが政府に認められませんでした。そこで、妙見は北極星や北斗七星の化身であるから天地創造の神である天御中主命と通じるものがあるとして、祭神を天御中主命と決めました。粟飯原家では「妙見」と称することができなくなった妙見神を「北斗明神」と申し上げています。

明治三十七年の火災により妙見尊は失われました。焼け跡から焼死体として見つかった妙見寺の最後の住職・千葉良胤の手に握りしめられていた宝剣・七星剣は焼失を免れたといえます。この後、千葉神社の管理には神職・粟飯原家が携わりましたが、粟飯原家はこれまで金銭など俗との関わりを避け祭祀を専一にしてきた神職家系ですので、経営には馴染まず、氏子とのトラブルにより千葉神社から退くこととなりました。以来、寒川神社の宮司として存続しています。

## ②. 瀧蔵権現

“千葉寺の瀧権（リョウゴン）”と呼ばれていた千葉寺町の瀧蔵神社は、千葉家の代々の当主が元服の儀式を行う習わしがあり、特に篤く崇敬されました。いにしえの千葉郡の中心に所在するので千葉氏もそれを意識したのかも知れません。

特に、妙見尊を大椎から千葉に遷したときには、その妙見尊は当初、瀧藏権現に祀られたと伝わります。その後、盗み出されて県立中央図書館下（字“三隅田”。後に通称“妙見田”と呼ばれる）に埋められていたのを発見され、その後、現在の千葉神社の地に祀られるようになったと伝わります。

長洲一丁目の瀧藏神社、寒川二丁目・三丁目の海津見神社（りょうごん様）はこの分祀だと思われます。なお、千葉寺の本山にあたる奈良県の長谷寺にも奥の院と称される瀧藏（たきくら）神社が存在し、関係性が指摘されています。

海津見神社には“浦祭り”が伝わっています。海岸埋め立て前には、舟に積んだ太鼓を打ち鳴らしながら“一番ぼんぎ”（一番沖の航路標）まで行き、都川を県庁付近まで遡ったといわれています。長洲一丁目の瀧藏神社から分祀した時の様子を再現したものか、あるいは、結城浦を守る祭礼の名残りなのか、今後の研究が期待されます。

### ③. 御達報稲荷と曾場鷹明神

千葉町の入口である稲荷町は千葉町の裏鬼門にあたり、稲荷神社が崇敬されました。古くは御達報稲荷、さらに古くは日本武尊が馬を放ったことに因む駒ヶ原神社と称していた古社です。

もう一方の入口にあたる貝塚町の車坂上付近は千葉町の鬼門にあたり、曾場鷹明神が祀られていました。現在は廃絶し、跡地は千葉神社管理地になっているようです。香取神宮の第一摂社は側高神社ですので、院内の香取神社との関係が想像されます。

### ④. 結城神明と堀内牛頭天王

残る2社は結城神明と、堀内牛頭天王です。

結城神明は現神明町の神明神社です。“神明”とは伊勢神宮から分祀するなどして天照大神を祀る神社を指します。結城の神明神社は後述する別当寺・光明院とともに、結城浦の鎮守として崇められてきました。

堀内牛頭天王は最新の研究では本町一丁目自治会館内に祀られている八坂神社ではないかといわれています。以前は、千葉大学医学部周辺に点在する“七天王塚”で

はないかといわれてきました。“牛頭天王”とは仏教世界の神で、仏陀が説法を行った祇園精舎の守護神とされ、京都でこれを祀る神社は明治の神仏分離の際に祇園社から八坂神社に改称しています。なお、京都の八坂神社の祇園祭の起源は、疫病退散を願って66本の鉦を立てて町を練り歩いたと伝わりますが、千葉と寒川の祭礼においても御鉦車を曳き出す点に類似性があります。鉦の靈力で邪気を祓う期待を込めたと考えられます。

#### (4) 結城浦

結城には“結城浦”とよばれた港がありました。千葉家が鎌倉と往復する他、下総一円の領内から鎌倉へ、またその先の京や大陸への交通の結節点でした。その場所は神明町付近にあった潟湖だと考えられていますが、都川の対岸である港町付近にあったとする説もあります。結城は古くからの湊町で、舟運に携わる船頭が多く住む町だったと考えられます。

中世の千葉寺からは千葉一族出身の学僧が大陸に渡って一切経を招来したことが知られており、中世の千葉寺の隆盛と同時に結城浦のグローバルな存在意義を伺い知ることができます。

#### (5) 君待橋

現港町交差点付近、稲荷町方面からきた旧道が大和橋へと右に曲がってすぐの場所に、亥鼻の東禅寺前から流れてくる小溝にかかる君待橋と呼ばれる小さな橋がありました。この橋には多くの伝説が伝えられてきました。

##### (ア) 橋の両岸の男女の物語

橋の寒川方に住む若い女性が、いつも橋の袂に立って長洲方からやってくる若い男性を待っていました。ある時、激しい雨が続いて橋が流された際、男性は川を渡ろうと水に入りますが濁流に飲み込まれてしまい、それを見ていた女性も後を追うように川に身を投げてしまったといいます。それを見た村人がいつしか「君待橋」と名付けたそうです。

## (イ) 藤原実方

995年、陸奥守となった藤原実方が任地へと下向中、ここを通りかかり里人に橋の名を聞くと「君待橋」と答えたので、「寒川や袖師が浦に立つけむり 君を待つ 橋身にぞ知らるる」と詠んだそうです。

陸奥（東北地方）に行くのに千葉を通るのは不自然ですが、最近の研究では、上総国に赴任していた藤原長能に会いに行った可能性も指摘する説があり、市川市の“真間の継橋”にも実方の足跡が伝説として伝わっています。また、仮にこの歌を詠んだのが実方であるとすると「君」とは、清少納言である可能性が高いと指摘されています。

## (ウ) 源頼朝

千葉常胤が一族を引き連れて、この橋で源頼朝を出迎えたとの伝説も伝わっています。頼朝が橋の名を問うと、常胤の六男・胤頼が「見えかくれ八重の潮路を待つ 橋や 渡りもあえず帰る舟人」と詠んだそうです。

## (工) 君待橋伝説の意味

長さが3メートル程しかない小橋であった君待橋がなぜこれほどの名所だったのでしょ。また、そんな小さな川で人が濁流に流されるのでしょうか。これまでは荒唐無稽な作り話だと考えられてきました。しかし、もし港町付近に「結城浦」の潟湖があったとすると、君待橋の下を流れていた小川がその痕跡かもしれません。稲荷町方面から来た街道が潟湖の出口を長洲方面に渡るための重要な橋だった可能性があるのです。そう考えると、洪水によって兩岸に住む男女が引き離されたと伝わる悲しい物語も一定の事実を踏まえた説話としての真実味が出てきます。

## (6) 千葉常胤と源頼朝

1180年9月、平家打倒を掲げた源頼朝が房総に逃れてくると、千葉常胤はいち早く加勢を決断、頼朝から「父のように思う」と信頼を得て鎌倉幕府成立に貢献しました。これが契機となり、千葉氏は名族といわれ、千葉町は鎌倉に次ぐ関東第二の町として栄えました。

この時、千葉常胤一行が頼朝の到着を待ったと伝わる“君待橋”が有名ですが、もう一か所、寒川三丁目と稲荷町の境を流れる川を“不寝見川”といい、千葉家の家臣が寝ずに番をしていたと伝わっています。

頼朝一行は、進軍の先々の神社に戦勝を祈願しましたが、稲荷町の稲荷神社には太刀一振を奉納したと伝わっています。また、新宿一丁目の白幡神社は、古くは結城稲荷と呼ばれていましたが、頼朝一行が源氏の白旗を立てたところから、白幡神社と称するようになったと伝わります。

## (7) 結城浜合戦と結城船頭

常胤が頼朝への加勢に出陣すると、下総国内の平家勢力の首領であった藤原親政が、拠点としていた千田荘（現多古町付近）から千葉に攻め寄せました。妙見宮に火を放ち結城浦に進撃した親政に対して、常胤の孫・成胤は僅かな手勢で応戦、空に現れた妙見の助勢によって奇跡的に勝利して親政を生け捕りにしたと伝わっています。この結城浜合戦は妙見の靈験を表す創作だと考えられてきました。しかし、地元には「結城の湿地で馬の脚をとられて動けなくなった敵を捕らえた」との具体的な内容が、また千葉神社には親政の放火による焼失の日付が、それぞれ伝承として残っています。その後の千葉の祭礼で結城の船頭が千葉家から格別の待遇を受けてきたこと、また鎌倉幕府の正史・吾妻鏡にも成胤による親政捕縛が記されていることなどを加味すると、敵が湿地にはまって動けなくなった状況下で結城の船頭の何かしらの貢献によって親政を捕縛、それを成胤と妙見の奇跡として説話にしたことも想像できるように思われます。

また、地元には「（千葉公園内の）綿打池は千葉様の舟の隠し場所だった」との伝承も残されています。江戸時代、綿打池の帰属を巡り隣村と争いになった時、役人の検分前夜に寒川村の綿打屋太郎兵衛がこっそり置いておいた弁天の石碑を根拠として寒川村への帰属が決まったとの伝承があります。しかし、寒川村の中心部から遠く離れた綿打池をなぜ自村だと主張し、その主張が通ったのか。太郎兵衛の機転の部分だけが抜き出されて伝承となっていますが、その背景には、寒川の人々が古くからこの池を自分たちの村として認識していた背景があったのではないかと感じられます。古地図では、池だけではなく、池に至る葭川の両岸も寒川村とされています。結城の船頭が（結城浜合戦では親政が結城浦の舟を制圧するために結城に進出してきたことを教訓として）綿打池を非常用の舟の隠し場所とし、満潮の時を

狙って兩岸を歩いて船を池まで引き上げていたのではないかとの想像もできるように思われます。

“御浜下り”と“結城舟”は、こうした千葉家に対する結城の貢献を語り継ぐために行われてきたともいわれています。“結城舟”の上から指揮を執る「大舟の船頭」は結城の町人から選ばれる最名誉役でした。舟形の山車の飾り幕が寒川神社に所蔵されていますが、その裏書には「建久年間（結城浜合戦の次の年）に作ったものが古くなったから（作り直す）」という趣旨の記載があることから、当時の寒川には、この祭礼が結城浜合戦をきっかけに行わたのだという伝承が語り継がれていた可能性が高いように思われます。

千葉家が佐倉に城を築いて千葉を離れた後の 1550 年、焼失した妙見宮の再建が完了したときの式典では、神輿の後ろを結城の町人代表が 22 本の鉾を持って従ったことが記されており、結城に対する千葉家からの格段の待遇の伝統が読み取れます。

いずれにせよ、結城地域と結城の船頭は千葉氏滅亡まで千葉氏から厚遇され、千葉町や千葉氏と一体の関係にあったということが伺えます。



## 【3】 近世

江戸時代、大和橋から本町側は“千葉町”となり、本町と吾妻町（現中央）周辺がその中心でした。大和橋から寒川側は“寒川（さんが）村”となりました。

### (1) 寒川(さんが)村

#### ①. 範囲

- ・長洲（旧上町）
- ・港町（旧上町、後に片町）
- ・寒川一丁目（旧中宿）
- ・寒川二丁目（旧下中町）
- ・寒川三丁目（旧下宿）
- ・末広の一部
- ・新田町（旧寒川新田）
- ・新宿（旧寒川新宿）
- ・神明町（旧向寒川）

この他、葭川沿岸（富士見町付近）と弁天町千葉公園内の綿打池までを含んでいました。また、現新千葉一丁目付近と、現緑町付近が飛び地となっていました。

#### ②. 結城から寒川(さんが)へ

神明町付近を中心として“結城”とよばれていたこの地域は、天正年間（1573～1591年）より後、寒川町付近を中心として“寒川（さんが・さんがわ）”とよばれるようになります。

その理由は不明ですが、背景の一つには千葉氏滅亡によって千葉氏から厚遇されてきた船頭集団としての結城が衰退したこと、もう一つはこの頃から紀州漁民が大挙して房総半島に移住したことが挙げられます。明治まで、結城の中心であった神明町付近には船頭衆の末裔としての海運業が多かったのに対して、寒川の中心であった寒川町付近は漁師と魚問屋が多かったこともそれを物語っています。

和歌山県日高郡日高川町の寒川（そうがわ）神社の氏子に、今の結城・寒川地区の旧家と同じ苗字が多いのも興味深い点です。的場、平野、日暮、鈴木、大塚、長谷川、並木の各姓です。詳しい関係は未調査ですが、寒川の住人の起源の一部が紀州にあるのは間違いないように思われます。

後述の丹後堰用水を開削した布施丹後（1628年没）はこの頃の寒川村の名主と伝わりますが、自身が存命中に千葉寺境内に立てた用水路完成の記念塔の銘文に興味深い点があります。用水の水によって恩恵を受ける地域を「結城、千葉寺、千葉、、」と列記した最後に、自身の名を「三川住人布施丹後」と記しています。結城から寒川への過渡期に、地域の名称と“結城”と記しながら、自身は三川住人と名乗る点に、地名変更の鍵があるように思われます。

さらに、登戸村名主の鈴木利右エ門は天正年間に寒川村から登戸に移住したと家譜に記されており、この天正年間は、結城と寒川の住民の力関係に大きな変化があったことが推測できます。

その後、旧結城地域の中心である神明町は、寒川村の中で「向寒川」という名称となり、古い地域ながら不本意にも新寒川地域から「川向こう」と呼ばれるようになりました。

### ③. 寒川神社

寒川神社は明治以前には“神明様”とよばれており、明治元年にそれまでの天照大御神に加えて寒川比古命と寒川比女命を合祀することで寒川神社と改称しました。古文書には「寒川の本村にも神明宮あれど、そは寒川新田なるを後に勧請して祀れるなりとぞ（伝わる）」などと記されています。おそらく町の中心が神明町から寒川町に移る過程で神明町の神明神社から分祀して移転したのではないかとわれています。寒川大橋の袂に寒川神社の所有地がありますが、それは、神明町の神明神社から寒川町の現在地に遷る過程で、一時的に祀られた仮宮の跡ではないかといわれています。

寒川村となって以降、村人は結城神明を遷した寒川神明宮を総鎮守と仰ぎました。1746年の寒川村指出帳によれば、神社は以下の四社です。

#### ■総鎮守：伊勢明神（神明様 現寒川神社）

二の鳥居の銘“延享元年”（1744）が創建年ではないかとする説があります。

#### ■村内の三社

- ・伊勢明神（現神明神社 神明町 旧称：結城神明）
- ・白幡大明神（現白幡神社 新宿一丁目。旧称：結城稲荷）
- ・瀧蔵神社（現龍蔵神社 長洲一丁目。旧称：瀧蔵権現）

#### ■現在確認できる旧村内の神社

- ・道祖神社（新田町） 千葉三道祖神の一 1762年の道標を移転保存。
- ・巖島神社（港町）
- ・神明諏訪合社（港町）
- ・栄徳稲荷（出洲港） 昭和39年創建。
- ・王子神社（神明町）
- ・海津見神社（寒川二丁目）
- ・海津見神社（寒川三丁目）

#### ④. 光明院

現在、寒川小の隣にある海詠山神明寺光明院は、千葉家の時代には神明町の神明神社の近隣にあり、別当寺として結城浦の海運を管理する役割を担っていました。鎌倉幕府の外港であった横浜市金沢の六浦港との間に水運が開かれており、金沢文庫の古文書に「光明院」という文言が登場しています。神明神社から寒川神社への“鎮守様の移転”に伴って別当寺である光明院も寒川神社近くに移転したと考えられます。

#### ⑤. 佐倉藩の御米藏と御用港

江戸時代、寒川村は千葉町や千葉寺村とともに佐倉藩領でした。寒川村には佐倉藩の御米藏と御用港がおかれていました。東京ガスの敷地がその跡地です。当時、千葉から江戸への交通は船運が盛んに用いられました。馬と舟の輸送能力の違いの他、登戸から稲毛に至る海岸は崖下で広い道が無く、江戸に行くには穴川十字路経由で稲毛に出る必要がありました。千葉町からは薪や炭が大和橋付近の河岸から都川を通過して江戸に送られました。佐倉藩の年貢米は領民によって寒川御蔵まで運ばれ、そこから船で江戸に送られました。ある時期の記録では千葉町が600戸、寒川村は470戸。湊町としての繁栄が偲べれます。

#### ⑥. 丹後堰用水

1625年、寒川の住人・布施丹後常長は都川と支川都川の合流点に堰を築いて溜池を作り、そこから猪鼻山の裾をまわって寒川村、千葉寺村、五田保に至る農業用水を建設しました。工事は1613年から12年に渡り、雇った人足は7千人。私財を投げうち田畑を売り払い、子・雅楽助の代に完成し、流域の農民に大変な恩恵を与えました。千葉寺境内に残る記念の石塔は常長の存命中に建てられたもので、用水の由来のほか、「子の雅楽助と日夜辛苦をともにして完成させたものなので、将来、用水が途絶えるようなことがあれば、誰でもいいから修理してほしい」という

旨が刻まれています。この遺志を受け継ぎ、「丹後堰水利組合」が設立され、水の恩恵を受ける農家が長らく修繕費用の積立をしてきました。用水を利用する農家も無くなったため、昭和 年、水利組合は解散し、その残金は千葉寺（屋根の葺き替え）、稲荷町（会館新築）、寒川神社へと寄付されました。

## ⑦. 漁師町と漁師料理

漁業では“六人網”とよばれる巻き網漁の一種の揚繰漁が盛んに行われていました。“おきえ舟”に乗る“おきえ”（漁労長）の指示の下、網を曳く二隻の“あんぶね”（網舟）が左右に広がりながら魚を取り囲んでいき、次第に網を絞って魚を獲る方法です。狙う魚はアジやイワシなどの群れを成して泳ぐ魚です。獲れた魚は“おしょくりぶね”（押し送り舟）とよばれる高速船でそのまま江戸の日本橋に水揚げされたといわれます。

江戸との間を往復するため、押し送り舟には竈の設えがあり、簡単な煮炊きをして船内で食事ができました。「寒川を出るとき飯を炊き始めれば、炊き上がる前に江戸に着く」といわれました。揺れる船内での調味料は醤油ではなく味噌で、獲れた鰯などを包丁で細かく叩いて味付けをしたもの、また、それをシャモジなどにつけて火で炙ったものなどが考案されました。それを見た他の地域の漁師が、生の方を“生寒川・なめ寒川”と、焼いた方を“寒川焼き”と呼び、広く房総沿岸に伝わっていったといわれています。寒川が千葉の郷土料理“さんが焼き”と“なめろう”発祥の地といわれる所以です。

## ⑧. 妙見祭と寒川神社

### (ア) 祭礼

寒川村は寒川神社を村の総鎮守として崇めつつ、伝統的に千葉妙見宮を熱心に信仰し、祭礼への奉仕を続けてきました。「妙見様が海に入らないと漁がない」と言われ、寒川の六人衆が神輿に掛ける紫絹の網を奉納していました。

もともと、寒川神社の例祭は旧暦 9 月 20 日で、御幣を新調し、古い御幣を海に流す神事であったと伝わります。

妙見宮の祭礼では、祭礼期間中の 7 月 20 日に、寒川村の人々が現市場町の御仮屋に出向き、妙見宮の神輿を引き受けて村内を巡った後、御浜下りを行ってから御

仮屋に神輿を戻しました。そして、その翌日の 21 日に寒川神社の例祭も行うようになりました。本来、神様を載せた神輿が氏子の地域を巡る“神幸祭”を伴うお祭りの場合、先に神殿で祭典を行って供物や舞で神様に喜んでいただいてから神幸祭を行うものです。しかし寒川神社では例年、20 日に神幸祭を行った後の 21 日に神殿での祭典を行います。これは、妙見祭に合わせて例祭日を変更した影響だと考えられています。

## (イ) 絵巻の発見

祭礼の様子はこれまで不明でしたが、平成 4 年、福島県相馬市で千葉一族の相馬氏が崇敬した相馬妙見歓喜寺に伝わる絵巻に江戸時代の祭礼が描かれていることが判りました。そこには、大和橋付近と進む神輿と、結城舟と千葉舟という二隻の山車が描かれており、初めてその実像が判明しました。

## (ウ) 飾り幕

寒川神社にはこれまで「大舟の飾り幕」と伝わる幕が所蔵されていましたが、絵巻の発見で、それが江戸時代の結城舟の飾り幕に取り付けてられていたことが実証されました。

その幕は 1850 年に製作されたもので、裏書に「400 戸の村人が一日一銭を出し合って」作ったと記されています。なお、町の氏子の家々で祭礼のための費用を毎日積み立てる「番貯」という風習が戦後すぐくらいまでは残っていました。

裏書に残る役員を列記します。

■千葉寺村名主（寒川村兼帯）秋元与惣兵衛、■組頭 清古善左衛門、三賀屋平太郎、中嶋半四郎、松井金五郎、湯浅市兵衛、■百姓代 山本卯兵衛、丸屋庄兵衛、松井七右衛門、布施重七、鈴木弥右衛門、奈部川彦八、田中吉兵衛、湯浅市三郎、仁平文次郎、■新田世話人 北川清右衛門、中嶋半兵衛、太田屋安五良、日暮助五良、鈴木権兵衛、鈴木万吉、湯浅弥之助、■新宿世話人 石川幸次郎、森川庄松、斎藤孫十、深山文兵衛、鈴木弥一郎、日暮左五右衛門、森川喜左衛門、■向寒川世話人 楠原要助、日暮佐吉、楠原藤吉、日暮留次郎、深山彦太郎、■上町世話人 奈部川安太郎、松井市太郎、深山長八、■中宿世話人 松井六右衛門、鈴木久次

郎、松井甚之助、■下仲町世話人 田谷太郎兵衛、小池治郎作、鈴木重七、今井弥七、田谷市太郎、■下宿世話人 長谷川久兵衛、布施徳兵衛、伊藤巳之助、永嶋林蔵、■半頭 鈴木七三郎、鈴木五郎吉、篠崎清五郎、楠原彦左衛門、鈴木長十、楠原半十郎、日暮信蔵、日暮甚九郎、楠原藤九郎、深山伝六、深山源左衛門、田中吉兵衛、鈴木清八、伊藤嘉兵衛、松井清十郎、鈴木小十、鈴木清五郎、鈴木市兵衛、布施甚右衛門、神崎弥右衛門、松井金四郎、布施五兵衛、高田千太郎、長谷川庄八、長谷川弥五郎、石川清兵衛、高田八郎兵衛、石渡甚十。

## (工) 千葉町の変化と千葉との関係の変化

中世以降、武士町の千葉に対する町人町の結城として、結城は千葉家が主催する妙見祭を町人の代表として支え続けてきましたが、千葉家滅亡以降、千葉は武士の町から妙見宮の門前町へと変貌し、妙見祭の担い手は千葉家から千葉町の町人へと移ってきました。

また、結城側でも紀州漁民の移住によって、町の主導権が結城から寒川へと移ったことで、千葉と寒川の関係は次第に希薄になっていきました。

さらに、明治の末に千葉神社宮司を追われた粟飯原家が寒川神社の宮司職となったことも大きな影響を与えました。

## (2) 千葉寺村

### ①. 範囲

- ・千葉寺町
- ・稲荷町（千葉寺村の人々が移り住み、千葉寺村新田“五田保”とよばれました）。
- ・末広の一部
- ・その他、青葉町の一部、葛城の一部、南町の一部を含んでいました。

### ②. 千葉寺の栄華

1623年に徳川家二代将軍秀忠を大壇主として観音堂を新築。その後、元禄年間にかけて最盛期を迎えました。住職は将軍拜謁の格式を有し、江戸登城の際には金紋先箱の供揃いで朱塗りの網代駕籠に乗って江戸まで行列したといわれています。

### (3) 千葉町

#### ①. 千葉家滅亡後

室町時代に入ると千葉家は内部分裂で弱体化、居城は千葉から佐倉へと移され、さらに、豊臣秀吉の北条征伐によって北条氏と運命をともにして滅亡しました。

下総国の首府として賑わった千葉町は、千葉家とともに衰退し、江戸時代には妙見宮の小さな門前町になりました。

しかし、その後、明治になって県庁ができるまでは大きな開発を免れてきたため、「掘れば中世が出てくる」可能性がありましたが、地表は戦災と市街化により、地中は戦後の開発で無秩序に掘り返され、往時の繁栄をしのぶよすがが失われてしまったことは残念なことです。

#### ②. 祭礼

幕末頃の祭礼の様子を、郷土史家の故和田茂右衛門さんの記事より抜粋します。

#### (ア) 日程

旧暦7月16日未明、神職2名と僧1名が役員や警護の若衆を伴って妙見洲に赴き、神官が齋戒沐浴した後に海中で最初に手に触れた藻のようなものを持ち帰って神輿の中に納める儀式がありました。現在は8月15日の夜に高張提灯を伴って、故地にあたる中央港のイオン向かいの歩道で神事を行っています。神明公園前から国道に向かう路地が妙見洲に至る旧道で、行列はその途中の海保家で小休止する習わしがありました。妙見宮に帰る途中に、猪鼻山下の御茶ノ水の不動尊に参詣する習わしもありました。

16日、御霊遷しの後、御鉦、太鼓、神輿の順で出発。正面の山門（戦災で焼失した二階建ての楼門）をくぐらずに脇から出て院内公園奥の香取神社に渡御して、ここで屋根に孔雀をつけました。妙見宮より先に鎮座している地主神への配慮と伝わります。その後、町中を渡御して市場町の御仮屋に納めました。

20日、寒川の人々が御仮屋に出向いて神輿を引き受け、町内を渡御した後に、出洲の妙見洲で御浜下りを行い、御仮屋に納めました。

22日、御仮屋から出て町中を渡御し、香取神社で孔雀を取り外し、今度は山門から境内に還御しました。山門に入れる・入れないの揉みあいが見ものだったと伝わります。

## (イ) 舟形の山車

神輿の他に、舟形の山車を曳きました。江戸時代までは木造の舟だったことが古い絵巻から伺えますが、幕末になると骨組みだけを舟形に造っていたと伝わります。当初は結城舟だけでしたが、後に千葉舟も加わりました。

二隻の舟は神輿を送って海中まで行き、神輿より先に上がって結城舟（後に寒川舟とよばれた）は君待橋の袂で、千葉舟は安田鰻の前で神輿を待ちました。

## (ウ) 地域をつないだ祭礼

千葉町祭礼は広範な地域が関わるお祭りでした。

神輿のかつぎ手は辺田村（現都町）と貝塚村（現貝塚町）の人々でした。神輿かつぎは、晒木綿の半纏、襟に町名、背に月星紋、縄の帯、半股引、白の足袋はだしという装束、太鼓打ちは、揃い浴衣、花笠、腰に火打袋、白の足袋はだしという装束でした。

この他、神前に供える米や野菜は、古くは千葉中野（現若葉区中野町）から奉納されたと伝わります。

妙見様が御仮屋に滞在されている祭礼期間中、寒川の人々は毎日のように御仮屋に参詣に行きましたが、近隣ばかりでなく、千葉一族が所領としていた下総国内の東金、片貝、横芝、成東などからは七五三の子供が御仮屋に参詣する風習が、横戸、勝田、宇那谷からは新盆の家の人々が御仮屋に参詣する風習がありました。戦前までは御仮屋周辺には露店がたくさん立ち並び、とても賑わったということです。房総でも有名な高市（たかまち）の一つでした。

## (4) 参考 登戸村

### ①. 登渡神社

1644年、千葉家の末裔・定胤が先祖の追善供養のため千葉の妙見寺の末寺として建立した白蛇山真光院定胤寺が前身で、別殿に妙見尊を祀り、“登戸の妙見様”とよばれていました。明治の神仏分離により、別殿の妙見尊を神社とし、真光院を廃して、その敷地を社務所としました。

### ②. 登戸湊

登戸も“登戸浦”とよばれる湊町で、江戸へと渡る人や物資の集積地として賑わいました。



## 【4】 近現代

### (1) 県都として

明治6年、千葉県が設置され、千葉町の市場町に千葉県庁がおかれしました。都川の舟運をおさえる交通の要衝であったからだとされています。

大正10年、千葉市が発足し、県庁の向かいの長洲に市役所がおかれしました。二代目の庁舎は東京内幸町で旧日本勧業銀行の本店として建築された建物を移築したもので、1961年まで利用された後、現在も美浜区の千葉トヨベツト本社屋として利用されています（国の登録有形文化財）。

### (2) 旧暦から新暦へ

明治6年、政府により暦が旧暦（太陰太陽暦）から新暦（グレゴリオ暦）に移行されました。これに伴い旧暦7月16日～22日に行われていた千葉と寒川の祭礼は新暦8月16日～22日へと一カ月の“月遅れ”に変更されました。この時、日本各地では盆も旧暦7月から新暦8月へと“月遅れ”にされましたが、千葉町と寒川村は東京に倣い、新暦7月に行うことにされ、今に至っています。祭礼との日程の分散を狙ったと伝わっています。

### (3) 廃仏毀釈と復興

度重なる火災で衰退してきた千葉寺は明治期の廃仏毀釈により明治27年から四年間は無住となり、寺の宝物や什物は盗まれ境内には雑草が生い茂り見る影もないほど荒廃しました。心を痛めた千葉寺村の人々は明治31年に迎えた新住職のもとで田畑を寄付するなどの復興を進めて明治42年に本堂を竣工、復興の第一歩として盛大な御開帳大法会が行われました。

同43年、寺勢拡大のため長洲の真福寺と合併しました。この真福寺は草創当初の寒川小学校の仮校舎となっていた寺です。

平成29年の年末、隣接する瀧藏神社で、氏子が普段は手を入れない社殿の奥まで掃除をしようとしたところ、平安後期まで遡る県内最古級の木造の女神像と獅子頭2面が発見されました。寺宝はもう何も残っていないと思われていた千葉寺です

が、神社で仏像を祀ることを禁じた廃仏毀釈から免れるために奥深くに隠していたものとも考えられ、今後の研究が期待されます。

## (4) 軍都と空襲

戦前の千葉には軍関係の様々な施設がおかれ、軍都としての色合いを濃くしました。現在のハーバーシティー蘇我の敷地は昭和15年に海岸を埋め立てて日立航空機千葉工場がおかれていた場所です。こうしたことから、昭和20年には6月10日に日立航空機を目標とした空襲に、7月7日には千葉市街全域を目標した“七夕空襲”に見舞われ、市街地は焦土と化しました。

## (5) 戦後の新たな御浜下り

### ①. “妙見様の御浜下り”の終焉

近代の千葉と寒川の関係を物語る伝承が残っています。「海水で神輿が傷むので、海に入らないようにと千葉側から要請された。寒川の長老が千葉に出向き『田んぼに埋められた妙見様を海で洗ったことに由来するものだから、やめるわけにはいかない』と説明した」というものです。

一時はそれで了承を得たものの、その後も関係は改善せず、寒川は自社の神輿を新調して御浜下りを行うこととしました。それまでは半纏の背には千葉妙見の月星紋が染め抜かれていましたが、以後は、八稜鏡に入れ替えました。それまで寒川神社には社紋が無かったので、同じ神明宮である船橋大神宮の社紋に倣ったものと思われる。この日を境に、千葉の妙見様を海に入れる御浜下りは、寒川神社の神様を海に入れて豊漁を祈る漁師の祭りへと変わっていったのです。これ以降、御浜下りが本来は千葉妙見の祭礼で、遙か昔に千葉の殿様から託された誇らしい行事であることを人々が語り継ぐことは無くなっていきました。

### ②. 神輿の新調

寒川村と千葉神社の初代の神輿は俗に「お化け神輿」「百貫神輿」と呼ばれ、「注文した人が台寸のつもりで注文したものを、受けた側が胴寸と勘違いして製作した」などの話が残るほどの大きな神輿だったということです。初回の渡御のときには寒川旧道で転回ができず「湯屋の戸袋と向かいの塀を壊して向きを変えた」「大橋を渡った下り坂で止まらなくなり、正面の交番に突っ込んだ」などの逸話が伝わっています。

この神輿があまりの大きさに担ぎきれなくなり、すぐに新調したのが二代目の神輿で、現在千葉市立郷土博物館に所蔵されています。

なお、戦後の初代神輿は謎の多い神輿です。戦争直後の食べ物にも不自由する時代にどのようにして高価な神輿を用意できたのか、どこかの神社から譲り受けたものなのかを含め、大きな謎として残っています。また、その後の消息についても「二代目神輿の下取りに出した」と伝わりますが、東京浅草の宮本太鼓神輿店の記録にも残っておらず、実のところは不明です。東京佃島の住吉神社の宮本神輿は人形町の末廣神社から譲り受けたとのことですが、末廣神社に伝わった経緯が不詳とのことから、平成14年頃に、これが初代の寒川神輿ではないかとの見立てがなされました。姿や大きさは大変よく似ているとのことですが、確証が得られないまま今に至っています。

### ③. 一年の中心

寒川では祭を“マチ”と言っていました。この頃まで、寒川の人々にとって、“マチ”は一年のカレンダーの中心でした。

御浜下りでは神輿とともに深夜まで海中にいて、神輿を担ぐときの掛け声は「ほらやれ、ほらやれ」「明日ねえぞ、明日ねえぞ」といいました。祭は今日だけしかない、という意味です。

当時、神輿よりも、それを先導する大太鼓の方が祭の花形で、地域に住む力自慢の若者によって打ち鳴らされ、太鼓の皮をどちらが早く打ち破るかを町会で競い合いました。祭が近くなると、古タイヤを叩いて練習する光景が見られました。

家の前には、提灯掛けを設えたり軒に吊るしたりして御神灯（提灯）を掲げ、櫛を立てました。祭礼の当日には、朝の暗いうちから赤飯を炊き、近隣の親戚などに「今日はお祭りだから来て下さい」と案内に行く“マチ迎え”をしました。家にきたお客は“マチド（祭客）”といい、ガネ（蟹）を茹で、西瓜を出して接待しました。

## (6) 舟運の衰退と工業港としての発展

古代から舟運を担ってきた結城・寒川でしたが、明治27年の総武鉄道（現総武本線）開通、明治29年の房総鉄道（現外房線）開通以降、物資輸送は鉄道へと移

り、地元による舟運業は衰退していきました。なお、明治 29 年に開通した房総鉄道には現千葉中央駅付近に駅が設置され“寒川駅”と称しましたが、同 35 年に本千葉駅と改称され、昭和 33 年に現在地に移転しました。

一方、県は明治 43 年に都川河口を浚渫して港を新設、港に沿って周辺を民間資本が埋め立てを行い“出洲港”が形成されました。これが、市川市から袖ヶ浦町までを含む広大な“千葉港”へと発展していく発端となりました。

昭和 47 年から 51 年まで、東京港に客船埠頭が未整備だったため、出洲埠頭から徳島港までオーシャンフェリーが定期航路を運航していました。今も岸壁に痕跡が残っています。

現在、幕張の浜で行われている花火大会は、千葉ポートタワーや稲毛の浜と場所を転々と変えましたが、当初は千葉港の中心であった都川河口で昭和 23 年から 48 年まで行われていたものです。現在の東京ガスの敷地にあったコールタール置き場の屋根に登って見物していた多数の観客が、屋根の崩落で転落し、千葉大学病院に搬送されて洗浄・処置されたという珍事も発生しました。

## (7) 魚市場の開設と移転

昭和 12 年、寒川船溜に隣接して魚市場が設けられ、寒川を中心とする魚問屋の組合が運営にあたりました。寒川二丁目の“千葉市場前”郵便局がその名残です。寒川は市場の門前町として製氷店や折箱店など市場関連の店舗をはじめ、多数の飲食店が軒を連ねました。現在でも銭湯が多いことも特徴の一つです。

昭和 36 年、市による公設の卸売市場が問屋町（現ポートアリーナ敷地）に開設され、魚市場の機能は移転しました。昭和 54 年にはさらに美浜区高浜の現在地に移転。この影響で、寒川の魚問屋業とそれに関連する店舗も衰退していきました。

## (8) 海岸埋め立てによる漁業の終焉

戦後、千葉市は復興への足掛かりとして海岸の埋め立てによる企業誘致を推進しました。昭和 28 年には日立航空機跡地に開設された川崎製鉄（現 J F E スチール）が操業を開始、初めて 1 万トン級の船舶（高栄丸）が入港しました。

昭和 30 年代に入ると埋め立ては本格化し、寒川に最後まで残っていた漁業も終焉へと向かいました。

当時の漁業者は漁業補償問題で行政と対立していました。これを物語るエピソードが残されています。寒川神社のお祭りの際、神輿を担いで知事官舎の前を通りかかったとき、誰からともなく「突っ込んじゃえ」という話になり、メリメリ、バキバキと塀や玄関を壊しながら神輿を担いで入って行きました。驚いて飛び出してきた知事に対して寒川の田谷総代が「知事、おめでとうございます。神様が知事のお宅に行きたいというので皆でお連れしました。苦勞して神様を連れて来た若い衆に酒の一杯でも振舞ってあげてください。」

## (9) 寒川文化の終焉と復興

舟運業、魚問屋とその関連業、そして漁業。寒川の人々が生業としてきたものは短期間のうちに次々と失われ、寒川は衰退しました。寒川の人々の気持ちの拠り所であり、出洲海岸で 800 年以上行われてきた御浜下りも昭和 38 年頃を最後に途絶えました。出洲海岸の妙見洲にあった鳥居は撤去、寒川神社に移設されて一之鳥居として利用されていましたが、平成元年の千葉県北部地震後に損傷・撤去されました。

急激な環境変化は地域に大きな影響をもたらし、特に寒川町付近は他地域の戦後復興の陰で沈下して行きました。近隣地域から「寒川はこわい所」との声が漏れ聞こえるようになったのもこの時期からです。反社組織への人材供給源ともなっていました。

寒川の名誉回復の期待をこめて、平成 12 年に場所を千葉ポートパークに移して御浜下りが復活、21 年に千葉市地域文化財に登録されました。

## 【5】まとめにかえて

結城・寒川地区は古代から現代まで、千葉という舞台の常に中心にありました。それ故に、その光と影を映してきました。これを読んだみなさんが地域の歴史を振り返り、胸を張って新しい歴史を創っていこうという気持ちになっていただけることを心から願ってやみません。